

## Contents ▶

1 教育職員と事務職員による大学改革—〈公開シンポジウム〉報告 2 明星大学全学初年次教育科目「自立と体験1」を視察して 3 帝京大学アクティブ・ラーニング室および宮原俊之准教授「アクティブ・ラーニング特論1」見学報告 4 活動日誌

## 1 教育職員と事務職員による大学改革—〈公開シンポジウム〉報告

大学教育開発センター長 兼 FD・SD 部門主任  
心理・教育学系/大学アドミニストレーション研究科 教授 鈴木 克夫

去る9月13日(火)、町田キャンパスにおいて大学教育開発センター主催の第16回公開シンポジウムが開催された。テーマは、「教育職員と事務職員による大学改革—新たな「SD」とその義務化について考える—」である。これは、「大学設置基準等の一部を改正する省令」が2016年3月31日に公布され、2017年4月1日から教員を含むすべての職員に新たな「SD」が義務づけられることになるのを受けたものである。中教審における議論に参加した立場から、大学行政を経験した大学職員の立場から、そして大学外部の立場から、3名の講師による話題提供の後、パネルディスカッションが行われた。また、このシンポジウムは、大学コンソーシアム八王子による後援、ならびに恵泉女学園大学、相模女子大学、大正大学、玉川大学、明星大学、和泉短期大学の協賛を得て実施された。

参加者は、135名(パネリストおよび大学教育開発センター研究員を含む)で、内訳は、学外79名(内・協賛大学33名)、学内56名であった。また、参加者の職位は、教員23名(17.0%)、職員87名(64.4%)、学生11名(8.1%)、その他14名(10.4)である。協賛の大正大学人間学部教育人間学科教育・学校経営マネジメントコースの学生、ならびに桜美林大学大学院大学アドミニストレーション研究科の在学学生、修了生が数多く含まれていることも特筆される。

はじめに、篠田道夫氏(桜美林大学教授)からは、「中教審大学教育部会でのSD議論に参加して」と題して、中教審における議論の結論を踏まえ、求められる人材像、育成制度の構築方策等について解説があった。続いて、喜久里要氏(早稲田大学事務職員)からは、「SDを介し、大学と職員は何を考え、行動すべきか」と題して、何のためのSD義務化なのか、現状の事務組織・職員はどうか、ありがちなSD、これからの大学運営の課題、組織を動かすSDとするための提言などが行われた。最後に、小林浩氏(リクルート進学総研所長、『カレッジマネジメント』編集長)からは、「大学の外部から見たSD—高等教育専門誌編集長の視点から—」と題して、社会から見た大学の状況、3つのポリシーに基づく一貫した大学経営と価値の浸透、大学に求められているものは何か、そして、高校(入口)と社会(出口)のより良い接続が課題であるという問題提起が行われた。休憩の後、三谷高康学長の挨拶をはさんで行われた鳥居聖氏(桜美林学園人事部長/大学教育開発センター研究員)の司会によるパネルディスカッションでは、会場からの質問に丁寧に答える形式で議論が進められ、来年度からの新たなSDの義務化に向けて進むべき方向性の一端が示されたように思う。また、シンポジウムの終了後、パネリストや参加者とともに、ささやかな茶話会を設けることができたことも記録にとどめておきたい。

アンケート(78件、回収率57.8%)からは、参加者の満足度がきわめて高いことが読み取れるとともに、継続的、定期的な開催を望む声も多く、時宜にかなったテーマであったことは間違いのない。また、近隣の大学を中心に複数の大学、短期大学の協賛を得て実施できたことも成功の一因であったのではないかと感じた。大学教育開発センターとして、他大学との連携によって様々な問題に取り組んでいくことの重要性を感じた一日であった。

なお、2017年3月に刊行を予定している『年報』(第8号)で、このシンポジウムの詳細な報告を掲載する予定である。





## 2 明星大学全学初年次教育科目「自立と体験1」を視察して

大学教育開発センター IR部門 研究員  
人文学系/リベラルアーツ学群 准教授 大中 真

### はじめに

大学教育開発センター研究員として、今回、同じ多摩地区の明星大学を訪問した。明星大学には、本学のセンターに相当するものとして、明星大学明星教育センターが存在するが、その主催の下、「自立と体験1」科目の授業公開の行事が行われた（2016年6月17日）。本学からは、センター長はじめ他数名の研究員とともに筆者も参加した。本稿は、その視察報告である。

まず明星大学についてであるが、東京都日野市に位置し、開学は1964年である。しかし学校法人明星学苑の前身は、1923年に創立された明星実務学校にまで遡るといえる。学苑の建学の精神は「和の精神のもと、世界に貢献する人を育成する」となっている。現在は7学部（教育学部、理工学部、人文学部、経済学部、経営学部、情報学部、デザイン学部）11学科（来年度さらに心理学部を開設予定）、学部学生数は8,606人、大学院は5研究科11専攻で大学院生約124人、本学とほぼ同規模である。大学としての教育目標は「自己実現を目指し社会貢献ができる人の育成」を掲げている。近年は「教育の明星大学」をキャッチフレーズとして、大学改革の成功例として注目を浴びており、今回の視察訪問となった。

### 1. 「自立と体験1」とは

我々が授業公開に参加した「自立と体験1」とは、全学部学科横断の少人数クラスで、グループワークなどの体験学習の手法を用いて実施されている、1年生前期の初年次教育科目である。日本私立大学協会や日本高等教育開発協会から受賞を受けるなど、教育界で高い評価を受けている。授業公開日も、東北から関西に至る日本各地の大学や教育産業から多くの参加者があった。

授業の特徴を説明や資料からまとめると、次のようになる。

- ①授業は7学部11学科の学生による全員必修科目であり、入学直後に学部学科横断のクラスでアクティブラーニングなどを行う（2単位、成績は合否のみ）。
- ②全68クラスの63%を学部等所属教員が、30%を明星教育センター所属教員が、担当している（非常勤講師は7%のみ）。1クラスは30名で、さらに5-6名の少人数に分かれてグループ討論や授業を行う。
- ③明星学苑創設者児玉九十の教育理念を、「自校教育」として学長自らが各クラスごとに直接講話する。また「大学職員に取材する」授業では、学生たちが学内の各部署を訪れ取材を行い、普通は疎遠になりがちな学生と職員との関係構築の役割も果たしている。
- ④過去に「自立と体験1」を受講した上級生が、SA（スチューデント・アシスタント）もしくはTAとして全てのクラスに参加し、ピアサポートを実施している。
- ⑤明星大学独自の『自立と体験1』ポートフォリオを作成、『教案』と一緒に授業運営に使用されている（ポートフォリオは学外者でも購入可能）。

この科目は導入から7年目だといえ、当初は手作りで始めたものが、教職員の毎年の努力によって改善が加えられ、今では立派なポートフォリオを刊行するまでになったという。

上級生の積極的な参加の様子も印象に残ったが、SAはえんじ色の「MECポロシャツ」を着用し、SAコーチに任命されると、下級生のSAに助言したり、クラス巡回を行うなど、学生本人も非常にやり甲斐を感じているようだと言った。

### 2. 授業カリキュラム

「自立と体験1」のカリキュラム（全15回）は以下のようになっている。

#### 第1節「人と関わる」

- (1) オリエンテーション
- (2) 新しい環境で他者と出会う

- (3) 大学での学びを考える
  - (4) 聴いて相手を理解する (1)
  - (5) 聴いて相手を理解する (2)
- 第2節「人と関わる・学びのスタートを切る」

- (6) 明星大学を知る
- (7) 明星大学を紹介する
- (8) 図書館にふれる
- (9) 大学職員に取材する
- (10) 自分や相手の大切さを知る
- (11) ルールとマナーを考える

### 第3節「大学生活を見通す」

- (12) 卒業生から学ぶ
- (13) 仕事と自分について考える
- (14) これからの大学生活を描く
- (15) 未来の自分へのメッセージ

説明によれば、クラスの3・4回ごとに、振り返りの機会を設けているそうである。ちょうど筆者たちが訪問した週は、大学職員に取材する回だったようで、見学中に学内の至る所で、1年生たちが4人一組でチームを作り、グループごとに各部署を訪ねて質問したり、話を聞く場面に出くわした。

## 3. 体系的キャリア教育プログラム

「自立と体験1」を修了した新入生は、その後どうなるのか。1年後期または2年前期には、引き続き必修科目の「自立と体験2」が開講されている。「学科生としての自己実現の第一歩」がその目標である。2年後期になると「自立と体験3」があるが、これは自由科目で、「社会人基礎力を体験から学ぶ」ものである。さらに3年前期には同じく自由科目の「自立と体験4」が設置されていて、「就職活動の前提となる就職力を身につける」こととなる。

同時並行で、自由科目の「キャリアデザイン1」が1年2年後期に開講される。「キャリアデザイン理論に基づく自己理解・就業意識」を養うことが目標という。また2年3年後期に「キャリアデザイン2」が自由科目で開講され、「社会に出て働くための基礎知識・現実的態度」を学ぶ。

このように、入学時から3年生まで「自立と体験」と「キャリアデザイン」が並行して開講され、3年生後期に入ると学生たちはキャリアセンターを活用し、就活プロジェクトや各種講座に参加して卒業後に向けて準備を進めていくようである。つまり「自立と体験1」は、単に大学での初年次教育のみならず、将来の就職活動とも連動しており、その一環として位置づけられていることに特徴がある。

## 4. 初年次教育科目の導入の可能性と課題

授業公開日の日程は、午前中に学内を移動しつつ授業見学を行い、昼食を挟んで午後明星教育センター長と事務職員からの講演というものだった。説明の中で最も興味深かったのは、「自立と体験1」導入の経緯であった。それによると、明星大学でも2000年代に学生の学力低下や学習意欲の低下が明らかに見られ、それは休学・退学・除籍による離籍率の上昇として顕著に現れたという。それに伴い新入学生数も大きく低下し、全学的に危機意識が高まったのが最大の動機だということであった。

その後、学内の意見聴取や議論を経て、2010年に明星教育センターが開設され、同年に「自立と体験1」も開講された。教職員一体となった努力の結果、4年進級率（留年・退学することなく4年生に進級した学生の割合）は目に見えて大きく改善されたことが、講演で示されたデータによって裏付けられる。

このように、「自立と体験1」授業の導入が、大学経営にとっても非常に大きな成果をもたらしたこと、また受講した学生による授業評価がかなり高いことは、複数のデータから読み取れることである。筆者は終日、明星大学内を歩いたが、各職場での職員の雰囲気明るさ、学生と職員、職員と教員、教員と学生の親密さが目に止まった。これは教育機関として大切なことであろう。

確かに明星大学での試みは素晴らしいものであるが、もしこのプログラムを本学に導入した場合、どのような課題が挙げられるだろうか。

まず第一に、学生（SA/TA）、職員、教員の三者が参画して運営する必要がある。明星大学の場合は、明星教育センターが三者を統制する要の位置にある。同センターには所属教員や職員の配置などスタッフも支援する態勢も整っており、本学の大学開発教育センターでどこまで対応できるか、連携可能であるか、早急に考える必要がある。

第二に、全学挙げての態勢を作ることが可能かどうか。明星大学の場合は、学生の離籍率に対する全学的な危機感という、大きな動機付けがあった。本学においても、新入学生の減少、学生の学力低下については

一部教員間で深刻な懸念が広がっているが、これを大学全体での改革の意欲と実践につなげていくには、学長の強力なリーダーシップが必要となろう。明星大学での改革成功の理由として、学長のリーダーシップを挙げた教職員が多かったことも、印象に残った。

#### おわりに

授業公開の明星大学の対応は素晴らしく、情報も積極的に我々部外者に公開しており、多くのことを学ぶことができた。講座終了後に、任意で資料図書館見学のオプションツアーがあり、筆者はそちらにも参加した。大学図書館は非常に広く、大きく、かつ開放的で、多くの学生が中で過ごしていた。学生の図書館利用率は、かなり高いそうである。図書館はその大学を最も象徴的に表していると筆者は日頃から感じており、本学の図書館建て替えが急がれる。

一方で資料図書館には、シェイクスピアの戯曲集初版本「ファースト・フォリオ」やリンカン大統領コレクションなど貴重なものが展示保存されていた。また、明星学苑の歴史についても立派な展示があり、こちらも本学が参考にすべきことが多々あると痛感した。

明星大学と桜美林大学とは、以前から様々な交流や関係があったと聞いており、今後ともお互いに協力しながら、よりよい大学教育を目指してゆきたいと強く感じた。

### 3 帝京大学アクティブ・ラーニング室および宮原俊之准教授「アクティブ・ラーニング特論I」見学報告

大学教育開発センター FD/SD 部門研究員  
総合科学系/ビジネスマネジメント学群 講師 有賀 清一

#### 1. はじめに

2016年7月20日(水)、帝京大学八王子キャンパス SORATIO SQUARE 4階にある、アクティブ・ラーニング室を見学した。見学に参加したメンバーは大学教育開発センター長の鈴木克夫教授、同IR部門主任の藤田晃教授、筆者と筆者のゼミ生(3年生)2名である。

宮原先生はこのアクティブ・ラーニング室を活用して教職課程向けの授業である「アクティブ・ラーニング特論I」を実施している。この授業は「前期(I)と後期(II)をとおして初等・中等教育においてアクティブ・ラーニングを実現するための授業設計(指導案の作成)を行うことができることを目標」としている(「アクティブ・ラーニング特論I」シラバスより抜粋)。つまり、アクティブ・ラーニングを活用して、アクティブ・ラーニングを教える講義である。以下、今回の見学についての報告である。

#### 2. 教室の構成

アクティブ・ラーニング室に入った時に、最初に気付くのはプロジェクターの数が多いことである。教室の大きさは、最大で40~50人程度(据え付けの机ではなく、キャスター付き長方形の机で構成されている)の教室に、7台のプロジェクターが天井に設置されている。1台は教員用に教室正面のスクリーン兼ホワイトボードに向けられている。残りの6台は教室左右の側面にそれぞれ3台ずつ向けられている。こちらも、スクリーン兼ホワイトボードが取り付けられており、結局正面と側面の3面がスクリーン・ホワイトボードになっている構造である。通常のプロジェクターをこの大きさの教室に7台設置するのは難しかったのか、側面を向いたプロジェクターは短焦点のものである(図1)。側面に向けられたプロジェクターは学生用であり、今回見学した授業では6グループがそれぞれプロジェクターを使い模擬授業を行っていた。

プロジェクターの次に教室内で気づいたことは、高さ1.2m幅0.9mほどの金属製の棚に、Microsoft Surfaceが50台並んでいることである(図2)。この棚は、Surfaceが棚に収納されたときに自動的に充電することができるようになっており、並ぶというよりどちらかという挿さっているといえる収納方法である。教室入り口横に設置されており、学生は入室直後にここから各自1台のSurfaceを取り出してから席に着く。もちろん、Surfaceはこのアクティブ・ラーニング室で利用するためにすべて設定済みであるので、学生はSurfaceを開いてログインするだけで授業に参加する準備は終了である。教室内で学生のグループが作成された時に、そのグループごとに分かれてグループワークをすぐに実施できるようにするグループウェアもインストールされている。桜美林大学のビジネスマネジメント学群では、学生にiPadを配布することで、ある程度端末に均一性のあるBYOD(Bring Your Own Device)を実施しているが(年度によってiPadの種類が違うので完全に均一ではない)、やはり「iPadを忘れました」という学生は発生する。帝京大学アクティブ・ラーニング室で

のこのSurfaceを使った取り組みは、そのような問題は発生し得ないと思われる。ただし、全教室にこの棚とSurfaceを設置するのは非常にコストがかかるものと考えられる。

次に設備として気がついたのは無線LANアクセスポイントの多さである。通常の教室であれば、アクセスポイントは30人～100人に1台程度の設置になるが、このアクティブ・ラーニング室ではこの教室だけで5台のアクセスポイントが天井に設置されていた。最大で6つのグループに分かれてグループワークをすることができるので、計算上は1.2グループに1台である。ネットワーク接続を重視し、無線LANの障害による授業への悪影響を起こさないためであろう。この数のアクセスポイントを導入し、なおかつ近隣の教室からの電波も入るなかで、干渉を起こさないように設定するのは、設計者の努力があったものと思う。日本のモバイル環境がユビキタス化を多くの場面で完了させて数年たつが、ネットワークという生命線について、計画・管理・保守の大変さは利用者としては普段は気が付かないものの、「いつでも、どこでも、誰でも」利用できる環境を作るには努力があるということ、約2mおきに設置されたアクセスポイントを見ながら感じた。

最後に目についたのは、教室後方に置かれた高さ1m幅40cmほどの小型の持ち運び可能なホワイトボードである。今回見学した授業では利用されていなかったが、各チームで利用できるように用意されていた。昨年度のeラーニング推進委員会シンポジウムにお招きしご講演をいただいた、山梨大学大学教育センター副センター長の森澤正之教授は、アクティブ・ラーニングを実施する上で最も役に立ったのは、持ち運べるホワイトボードであったと述べていた。ディスカッションにおいて、ホワイトボードに内容を書き込ませることで、書き込み量によって進展の度合いが一目で分かる、誰が書いているかによって学生ごとの参加度の違いが分かることである。今回の見学では帝京大学アクティブ・ラーニング室においてどのようにホワイトボードを利用しているかを知ることができなかったが、同様の使い方をしているものと推察した。

パンフレットによると、この教室を利用しているのは、経済学部観光経営学科、教育学部教育文化学科、教育学部初等教育学科、高等教育開発センターである。



図1 短焦点の学生発表用プロジェクターとホワイトボード



図2 Microsoft Surfaceと収納・充電



図3 講義を受講する学生

### 3. 授業について

今回見学したのは「アクティブ・ラーニング特論I」のうち第11回「形成的評価」である。学生は、事前に模擬授業を準備して来ている。約6人のグループに分かれ、その中から教師役、児童役、観察者の役割分担を決める。その後、教師役がアクティブ・ラーニングを取り入れた授業を実施するという構成になっていた。筆者が興味を持ったのは、このときの教師役についてである。模擬授業は講義内で2回実施されるが、これでは全ての学生が準備してきた自分の模擬授業を発表することができない。ただし、教師役はランダムに選択されるので、誰が教師役になるかは事前には分からない。宮原先生にうかがうと、誰もがいつでも教師役をやるような状況で授業に参加することが重要なのだとのこと。筆者の授業で同じことができるかは、自信が無いが、全員に発表させる時間が無い中で、十分に時間を取って模擬授業を実施するための優れた工夫であると考えた。

この授業を履修しているのは、教職課程を取っている学生で、全員がすでに教育実習を終えている。そのため、筆者の見たところ授業への参加意識、やる気は非常に高く、クラス内でのコミュニケーションが活発に行われていたと感じた。実際、宮原先生によれば帝京大学の中でも参加意識の高い学生で構成されているとのことであった。

授業においては、既に述べたMicrosoft Surface、プロジェクターが効果的に利用されていた。Surfaceにはグループ内でファイル共有、相手の画面を表示する機能、教員からの課題ファイルの配布と、教員への課題ファイルの提出機能を持つグループウェアがインストールされている。見学した講義は全体の第11回目であり、学生が既に十分にこのグループウェアに習熟していたこともあるが、ファイルの受け渡しやコミュニケーションがこのグループウェア上でスムーズに行われていた(図3)。プロジェクターについても、各プロジェクターが各グループに割り当てられおり、無線で画面をプロジェクターに転送することができる。これにより、教師役の学生が素早く模擬授業を実施し、授業後のふりかえりに移ることが出来ていた。

#### 4. おわりに

今回、帝京大学八王子キャンパスにおいて「アクティブ・ラーニング特論I」を見学した。アクティブ・ラーニング室は、優れた設備が整っており、講義の進行を極めてスムーズにするための工夫が施されていた。講義は、その設備を十分に活かして教育効果を挙げるための深い考察が行われたものであると考えられる。ICTを道具として講義に取り入れるための工夫が随所に見られた。桜美林大学ですぐに取り入れることができるもの、取り入れるにしても時間が掛かると思われるものなどがあつた。しかしながら、ICTを活用した初等・中等教育は年々整備されており、大学教育が遅れていると指摘されるときもある。様々なICTについて、継続的に講義への取り込み方法等の検討を続ける必要があるものとする。

宮原俊之准教授にはFDの一環として、今年度桜美林に大学教育開発センターおよびBM学群主催でお招きしてご講演頂く予定で準備を進めている。

## 4 活動日誌

- ・6月17日(金) 明星大学全学初年次教育科目「自立と体験1」授業公開参加(研究員4名)
- ・6月29日(水) リベラルアーツ学群2016年度第1回FD研修会参加(研究員9名)
- ・7月20日(水) 帝京大学八王子キャンパス「アクティブ・ラーニング特論I」授業見学(研究員3名)
- ・8月2日(火) 明星大学地域交流センター来校(教育支援課・学生生活支援課)
- ・8月29日(月)・30日(火) 大学コンソーシアム八王子第6回FD・SDフォーラム参加
- ・9月1日(木) 明星大学地域交流センター来校(地域・社会連携室)
- ・9月13日(火) 第16回公開シンポジウム開催

2016年度<ビジネスマネジメント学群FD研修会>のご案内

### 実質的アクティブ・ラーニングの方法論 (仮題)

日時: 2016年11月9日(水) 17:30~19:00

場所: 桜美林大学町田キャンパス崇貞館6階H会議室

講師: 宮原俊之氏(帝京大学高等教育開発センター准教授・教育方法研究支援室室長)

コメンテータ: 田中一孝氏(桜美林大学人文学系・リベラルアーツ学群講師)

主催: 桜美林大学 ビジネスマネジメント学群

共催: 桜美林大学 大学教育開発センター

※ビジネスマネジメント学群以外の学群の教員、ならびに職員の参加を歓迎します。  
詳細が決まりましたら、改めてご案内いたします。

編集発行: 桜美林大学 大学教育開発センター

〒194-0294 東京都町田市常盤町 3758 其中館1階 101

E-mail: [fdcenter@obirin.ac.jp](mailto:fdcenter@obirin.ac.jp) Web: <http://www2.obirin.ac.jp/fdcenter/>